

旧石器時代の石器工場・白滝遺跡群



瀬下 直人 (せしも なおと)

遠軽町埋蔵文化財センター学芸員

1978年生まれ。札幌市出身。2001年札幌大学卒業後、白滝村教育委員会(当時)。2011年より現職。

はじめに

令和5年6月、遠軽町が所有する北海道白滝遺跡群出土品が国宝に指定されました。平成23年に重要文化財指定を受けた資料に、追加資料が新たに加わり、国宝へ「格上げ」されました。以下は指定答申時の報道発表時の説明資料となります。

全1,965点から成る一括。約30,000~15,000年前の遺物であり、わが国で最も古い国宝となる。後期旧石器時代前半期の小形剥片石器を主体として石刃技法が顕著な石器群と、同時代後半期の細石刃石器群、および細石刃石器群に優美で精巧な作りの尖頭器を伴う石器群などに分けられ、後期旧石器時代前半期から後半期に至る石器の変遷と組み合わせを明瞭に追うことができる。中でも、全長36.2センチメートルの超大形の尖頭状石器をはじめ、多数の木葉形尖頭器、それらの製作にかかわる数百点の剥片・碎片を接合した接合資料・石核、現存最大長の大形石刃等が注目される。わが国の旧石器時代遺跡出土遺物の中でも、内容・質量ともに群を抜く一括資料である。

旧石器時代の資料で国宝に指定されたのは初めてのことで、「わが国で最も古い国宝」と表現されているのはこのためです。

今回は、国宝をはじめとするこれらの石器にどういった価値があるのか？また、白滝遺跡群は遠い昔の時代にどのような影響を与えていたのか？について、掘り下げて紹介していきます。

黒曜石と白滝遺跡群

前号で紹介しましたが、遠軽町白滝には日本最大とも呼ばれている黒曜石原産地が存在しています。このガラス質の岩石は、昔の人々にとって大変重要な資源となりました。割れやすく、その割れ口は鋭利であるため、石器の材料として非常に優れた石材でした。



写真1 国宝北海道白滝遺跡群の主な石器(撮影者:佐藤雅彦氏)

このため、白滝地域内には主に旧石器時代をはじめとする多くの遺跡が地下に眠っています。このことが知られるようになったのは、昭和初期から、この地域で精力的に資料の収集を行っていた遠軽の考古学愛好家・遠間栄治氏（写真2）の活動が大きく影響しています。その後、白滝団体研究会による地質、地形、考古学など各分野による総合的な調査、明治大学や札幌大学の学術調査によって次第に遺跡の様相が明らかになってきました。



写真2 遠間栄治氏

平成7年から平成20年にかけて、旭川・紋別自動車道の建設工事によって大規模な遺跡の発掘調査が北海道埋蔵文化財センターや白滝村教育委員会（当時）によって実施され、総点数700万点以上、総重量は12トンを超える膨大な数の資料がもたらされました。

少し話が遡りますが、平成元年、白滝第13地点遺跡が国の史跡「白滝遺跡」として指定されました。調査が進むにあたり、周辺には保存状況の良好な遺跡が数多く存在することがわかってきました。平成9年、「白滝遺跡群」として7カ所の遺跡を追加指定し、名称が変更されました。

白滝遺跡群の特徴

簡単に遺跡の概要を説明すると、ここでは黒曜石を手に入れ、石器を製作していたということがわかります。発掘調査をしていくと、地下から顔を出すのはお



写真3 発掘調査の様子

びただしい数の黒曜石の欠片^{かけら}です（写真3）。出土資料の大半を占めるのは、石器を製作する際に生じる石の欠片です。黒曜石を加工して、製品となっていくプロセスにおいて、大量の欠片が生じます。これが白滝遺跡群の大きな特徴です。

当たり前のことですが、これらの欠片は元々一つの黒曜石の塊^{そろ}です。なので、パーツが揃えば元の形に復元することができます。写真4は「接合資料」と呼ばれるもので、可能な限り復元したものです。費やす労



写真4 接合資料（撮影者：佐藤雅彦氏）

力は多大ですが、ここから多くの情報が得られるため、組み立てる作業は大変重要です。

接合資料が物語るのは、石器の製作工程です。一つの黒曜石をどのように加工し、目的の石器を作っていくか、その過程を追って観察することができます。これは製作した場所でしか見ることができないため、学術的に大変重要な情報です。ここから、技術的な要素やどんな道具を用いて製作したか等を推測することも可能です。

このように、白滝遺跡群は旧石器時代の石器工場のような場所であったと考えられています。当時の生活、衣食住等の部分については、まだまだわからない部分はたくさんありますが、ここまでの情報量を持つ遺跡は国内でも稀まれで学術的にも重要な遺跡といえるでしょう。

旧石器時代の石器の移り変わり

旧石器時代は今からおよそ30,000～15,000年前の時代ですが、この期間同じ石器を製作し続けていた訳ではありません。環境や技術の変化によって石器の姿形も変わっていきます。

写真5は北海道で最も古い時期とされている、およそ30,000年前の石器です。筆者も最初に見た時はただの欠片にしか見えませんでした。接合資料を観察すると、これらは一定のルールに従って黒曜石を割り、目的とする道具を作っていたことがわかりました。



写真5 小形剝片石器群（撮影者：佐藤雅彦氏）



写真6 広郷尖頭状石器群黒曜石（撮影者：佐藤雅彦氏）

写真6はおよそ25,000年前の石器とされています。前者と比較した時に、先端が尖って細長い、といったような特徴が見られます。技術的に見ても、石材を加工する際に効率よく目的物を製作するための準備を行っていた様子を接合資料から見ることができました。時代が進むにつれて技術が進歩している証拠です。

細石刃という石器（写真7）が旧石器時代に多く見られます。この石器は幅が1cmにも満たない、薄くて細長い石器です。道具としては単体で使うものではなく、骨や木などに埋め込んで使用する「替え刃」です。この石器の登場により、従来の石器とは違い、石材を



写真7 細石刃（実寸）

大量に使わずに製作することができるようになりました。そのため、持ち運びもしやすくなり、移動生活が主といわれる旧石器時代の生活に適した石器といえるでしょう。

この細石刃ですが、できた石器は同じでも、時期によって製作方法に変化が生じます(写真8)。これもおそらく長い旧石器時代の中で、製作方法が変化する要因があったものと考えられます。

北海道内に旧石器時代の遺跡は数多くありますが、時代を通じて石器の移り変わりを見ることのできる地域は多くありません。遠軽町白滝という土地は、黒曜石を求めて長い期間利用され続けてきました。遺跡から出土した資料は、北海道の旧石器時代に登場する石器を網羅しています。



写真8 様々な形式の細石刃核と細石刃(撮影者:佐藤雅彦氏)

巨大な石器

白滝遺跡群出土品を語る上で注目する点の1つとして、普通では考えられないサイズの石器が出土する点です。

写真9は尖頭器と呼ばれる槍先やりさきです。大きなものは30cmを超える大きさで、研究者でも驚く大きさです。尖頭器のみならず、他の石器も軒並み大きいということも、大きな特徴ともいえます。

なぜ、ここまで大きな石器が出土するのか?答えは単純で、単に原石そのもののサイズが大きいからです。これは接合資料からもその様子をうかがうことができ



写真9 尖頭器

ます。それに加え、大きな石器は軒並み壊れている傾向があります。つまり、作っている最中に壊れてしまい、そのまま廃棄されてしまっています。現在の姿は接合した状態になっていますが、出土時はいくつかのピースに割れた状態になっていました。

失敗作といえればそれまでですが、こういった資料も旧石器時代に暮らしていた人の苦悩かいのようなものを垣間見る瞬間でもあります。うまくできた時はうれしかったのかな?と思わず想像をしてしまうこともあります。

おわりに

以上、国宝をはじめとした白滝遺跡群出土資料について簡単ではありますが、紹介してきました。あまり知られていない旧石器時代のことをおわかりいただけたでしょうか?

最近では、縄文遺跡が世界遺産になるなど、北海道の考古学関連のニュースは明るいものが目立ちます。北海道は位置的な理由もあり、日本の歴史の流れから少し外れた文化圏を形成してきました。また、同じ北海道の中でも西と東、内陸と沿岸地域では異なる文化が発展するなど多様性に富んだ地域といえるでしょう。

これをきっかけに、北海道の歴史について興味を覚えていただけると幸いです。